郷土室だより

第92号
平成８年６月15日
編集・発行
東京都中央区立 京橋図書館
東京都中央区築地1-1-1
電　話　3543－９０２５
刊行物登録番号 08-035

中央区の〝橋〟（その２）

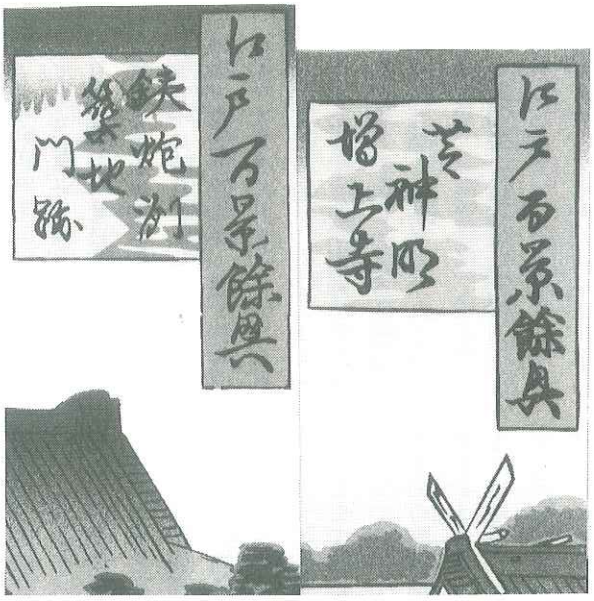
沼田からの手紙

この〝橋〟シリーズの第一回目は、去年の暮れに出た『郷土室だより』第90号でした。その後、第91号（三月発行）では『中央区沿革図集』の完結編である〔京橋篇〕の刊行に合わせた特集号であったため、約五か月ぶりの再開になりました。

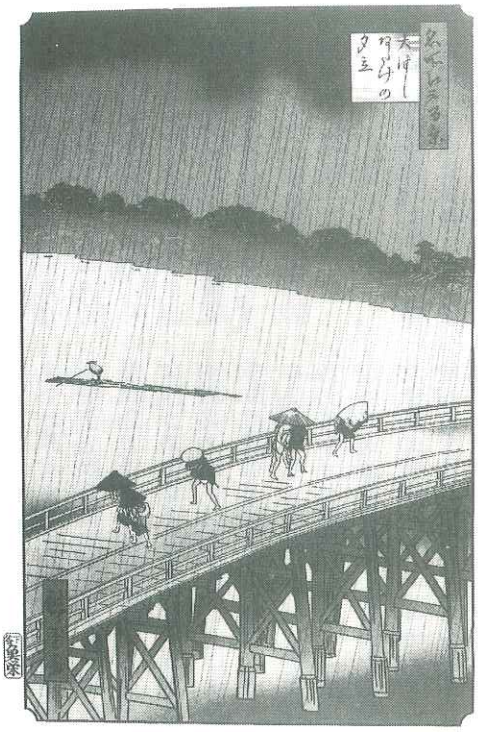
この間に、いまさらのように世の中というものは広いようで狭く、狭いようで広いということを思い知らされることがありました。

というのは90号で取り上げた「両国橋橋材事件」の当事者であった沼田城主　真田信利について、二人の沼田在住の方から手紙をいただいたことです。

「郷土室だより」という性格を考えて、なるべく中央区の範囲内に話題を絞って、はなしをすすめているのですが、はしなくもこの〝橋〟シリーズの第一回目に「上州沼田」に越境してしまいました。



「名所江戸百景」の中にまぎれている２枚の「江戸百景餘興」



「大はし阿たけの夕立」（現在の新大橋）⟶
ゴッホが模写した絵としても有名。

ところがその沼田から二通も反応があったことに驚くと同時に、心から有難いことだと感じました。

一通は故池波正太郎氏の作品の熱烈な読者からのもので、池波氏が真田一族を忍者を交えて何度でも手を替え、品を替えて取り上げたことを具体例でのべられたうえで、「あの昌幸が〝ふくろう〟のような知慧と執念で守り通した二つの真田家の一つが、いとも不様に消え去ってしまったことに、無情を感じた」というものです。

一通は今年から数えて三一五年も前の天和元年（一六八一）まで、沼田城主だった真田氏の改易を「徳川の意図的な政策」によるものだったと、真田信利に一脈の同情をまじえた感想のものでした。

信利という大名

前号ではこの「両国橋橋材事件」を主に江戸側の資料で紹介したのですが、この号では地元側の資料を『藩史大辞典』第2巻　関東編（雄山閣刊）から要約してみることにします。

信利が延宝八年に天下普請を命じられたことを、『大辞典』では「用材を沼田領より出すことを請負う」とあり、その下段に「この年暴風雨、大洪水あり（これが両国橋流失の台風と同じものと考えられます）、大飢饉、飢人、餓死者多し。沼田領の農民は飢饉と用材伐出し人足のため苦しむ」とあります。

翌天和元年の項には「この頃、沼田領の農民松井市兵衛、杉本茂左衛門、真田信利の悪政を越訴（おっそ）したと伝えられる」。同年十二月十九日に「真田家改易となり、領内に農民の騒動起る」という記事があります。

翌天和二年一月三日「沼田城は幕府の手により破却される」とあって、沼田から真田色が一掃されたことがわかります。

この信利は沼田藩主としては昌幸の子の信幸（之）から数えて五代目で、明暦三年（一六五七）に二三歳で沼田藩の当主になりました。その翌々年の寛文二年に検地を行って、公的な禄高が三万石だったものを、一四万四八〇石の収入があるように「打ち出し」しました。

これが信利の「拡大検地」、つまり領民に取っては四倍以上の大増税だったわけで、普通は公的な禄高はそのままに、実収を高めるのが常識だったのに、全く逆の事をやった殿様でした。これは信利にとっては家格を上げるための行為だったのですが、両国橋用材調達の幕命は信利の行為を「額面」通りに評価した結果だったといえましょう。

なお前号で信利は「元禄元年正月一六日配所にてうせぬ」と書きましたが、この配所は山形ではなく宇都宮でした。これは信利を預かった奥平家が貞享二年（一六八五）六月に山形から宇都宮（九万石）に転封（転勤命令）を命じられた時に、預かり人も奥平家と共に移ったものです。信利は享年五四歳、墓所は宇都宮の晩鐘寺です。

上州の巨木

沼田は中世から近世にかけた戦国時代には、関東と越後、そして信濃を結ぶ交通路の要所として、重要な役目を果たした場所でした。

豊臣秀吉の天下統一の総仕上げとしての小田原・後北条氏攻略の、直接的な原因は真田氏と後北条氏の沼田城の帰属をめぐる争いだったことは、あまりにも有名な事柄です。

そのような有名な事柄はさておき、ここでは三一五年前の上州沼田、いいかえると利根川水系の最上流部の森林地帯に、江戸の橋に使われたような巨木がはたして生えていたのでしょうか。

江戸の主要な橋の用材、とくに橋脚用の材木の寸法については、のちに改めて紹介しますが、天和というやがて一八世紀を迎えるのも間近という時点で、たとえば表紙にとりあげた「名所江戸百景」に描かれたような巨木があったということは、おおいに注目しても良いことだと思われます。

もっともいくら大木・巨木であっても、それを伐採して必要な場所に運ばなければ、資源とも用材ともいえないわけですから、比較的に人間が伐採に入りやすく、また運搬しやすい場所の森林の分

布が、ここでの興味の的のわけです。

沼田への旅

江戸についてのもろもろの事柄を、劇作と小説、とくに半七捕物帳の執筆とその門下生の育成を通じて、正確に現代に伝えてくれた恩人の一人に岡本綺堂（一八七二～一九三九）がいます。

その綺堂の生前最後の随筆集である「寄席と芝居と」は、明治時代の落語家の中で〝近代の名人と称せられているのは周知の事実である〟三遊亭円朝の事績を中心にしたものです。

綺堂が円朝をとくに取り上げた理由は、人情話の演者としてすぐれているだけでなく、「牡丹燈籠」や「真景累ヶ淵」、「塩原多助」などのストーリーを自作自演して好評を得たため、歌舞伎の方でもほってはおけずに円朝原作としてさかんに上演したことにあります。つまり綺堂は円朝を同じ劇作家として見ていたともいえます。

そしてこの随筆集の中で円朝が「塩原多助」執筆のため東京から沼田までの取材旅行の紀行文の「上野下野道の記」を細かく紹介して〝実に立派な紀行文である〟と再三にわたって賞嘆しています。

今なら上野―沼田間一四六・四キロを特急だと二時間二二分の行程ですが、明治九年（一八七八）当時は徒歩・馬・船以外には交通手段がなかった時代でした。

以下に円朝の「上野下野道の記」の日程とコースを簡単に紹介して、江戸・東京と沼田の〝距離〟をみることにします。

明治9年8月29日　千住―竹の塚―越ヶ谷大沢町の玉屋泊（約16キロ）

8・30　粕壁―杉戸―幸手駅
泊は釜林（約二三キロ、以下駅は宿場と同じ）

8・31　利根の渡（栗橋）―中田駅―真間田駅旧本陣青木泊（約二一キロ）

9・1　半田川―飯塚駅―小金井駅―石橋駅旧本陣伊沢泊（約二五キロ）

9・2　雀の宮―宇都宮手塚屋泊（約一五キロ）

9・3　宇都宮―日光街道上戸祭村―今市の櫛田屋―日光野口屋泊（約二六キロ）

9・4　日光見物　野口屋泊

9・5　日光―湯元温泉吉見屋泊（約二〇キロ）

9・6　湯元温泉―（金精峠越え、案内人磯之丞）―小川村の手前の温泉宿（今の白根温泉あたりか、地図上では約一五キロ）

9・7　九里の道を歩いて沼田の大竹屋泊（三六キロ）

9・8　沼田―前橋駅の白井屋泊（三〇キロ）

9・9　前橋紺屋町に妹お藤を尋ね一泊

9・10　前橋―太田、呑竜上人の新田寺参詣　はせを屋泊（約二〇キロ）

9・11　太田―足利　原田与左衛門方に泊（一五キロ）

9・12　猿田河岸から船で栗橋。さらに堺河岸で船を乗り換えて船中泊

9・13　野田―流山をこえて東京深川扇橋着

この一六日間の旅は綺堂の表現によると「この旅行は、彼が三十八歳の秋であった。」と結んでいます。そして円朝がこの時期に旅をしたのは、当時の八月から九月中旬までは「劇場、寄席、その他の興行物がすべて夏休」だったのを利用したのだと解説しています。なお、この部分の紹介は『綺堂芝居ばなし』（岡本綺堂著　一九七九年刊　旺文社文庫）によりました。また（　）内は、引用者の注です。

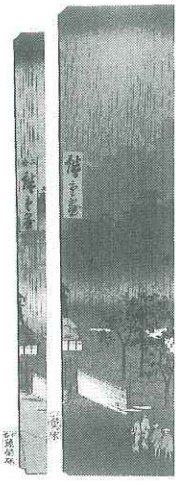
名所江戸百景

はなしを江戸にもどします。初代の歌川広重（一立斎）の晩年（一八五〇年代）の傑作シリーズに『名所江戸百景』、俗に「江戸百」と呼ばれる風景画があります。百景といっても目録を入れると一二〇枚。四季にわたって江戸市中とその近郊を描いたものです。

注　一二〇枚の内わけ
目録を除いた一一九枚の絵のうち、二世広重と明示してある「赤坂桐畑雨中夕けい」と、

「名所江戸百景」というシリーズ名の所が「江戸百景余興」と書かれたものが、私の知る限りでは二枚あります。（「芝神明増上寺」と「鉄炮洲築地門跡」）。このほかにも「江戸百景余興」シリーズが発行された可能性が高いように考えられますが、いまのところそれだけしか確認しておりません。つまりこの三枚をひっくるめて「江戸百」として、現在多く見られる解説書でも通用させています。

一世と二世の赤坂桐畑



この「江戸百」の中に橋が描かれているものは四六枚、つまり約三九％もあります。しかし橋といっても大川（隅田川）の橋と、江戸近郊の小川に架かった橋とでは、その構造も規模も全く違います。それらを含めての四六枚なのですが、ここでの主題である巨木を使った橋の有様を描いたものは「永代橋佃しま」、「大はしあたけの夕立」、「両国橋大川ばた」、「京橋竹がし」、「千住の大はし」の5枚位で、強いてつけ加えれば「亀戸天神境内」があります。

橋そのものを描いた「日本橋江戸ばし」、「深川万年橋」、「びくにはし雪中」などがありますが、その構造はかえってわかりません。「目黒太鼓橋夕日の岡」は石造アーチ橋ですから、ここでは対象外とします。

結局、巨木を使ったことがわかる、はじめに挙げた5枚の画からいえることは、大川の千住大橋から両国橋・新大橋、永代橋などの橋脚の太さは、橋上の人物と比較するとその直径はおおよそ二ヵ抱えの六〇～九〇センチほどであることが推定されます。

また現在の日本橋川にかかる日本橋・江戸橋、そして京橋などの橋脚の太さも大川の橋と大差はないように見えます。それにしても最初に紹介した隅田川の河口の「永代橋佃しま」の左端の橋脚はかなりな太さだといえましょう。

さらに橋ではないのですが「芝うらの風景」に描かれた澪標（みをつくし）＝航路標識があります。これも同じ画面の千石船の帆柱とくらべるとかなりの巨木を使ったことが推定されます。

「江戸百」の中の橋

ここで本題から少しはなれて「江戸百」の中に橋が見える絵の題名と近景・中景・遠景別を紹介しましょう（すでにとり挙げた絵は省略します）。

「日本橋雪晴」（中）、「両ごく回向院元柳橋」（遠）、「下谷広小路」（三橋の遠景）、「千駄木団子坂花屋敷」（建物間の渡り橋の遠景）、「広尾ふる川」（遠）、「品川御殿やま」（近・板橋）、「柳しま」（中）、「四ッ木通用水引ふね」（遠）、「真乳山山谷堀夜景」（遠）、「吾妻橋金竜山遠望」（遠）、「玉川堤の花」（近）、「八ッ見のはし」（中）、「昌平橋聖堂神田川」（中）、「水道橋駿河台」（遠）、「増上寺赤羽根」（遠）、「みつまたわかれの淵」（遠）、「両国船中浅草遠景」（遠）、「浅草川首尾の松御厩河岸」（遠）、「駒形堂吾嬬橋」（遠）、「綾瀬川鐘か渕」（遠）、「深川八まん山ひらき」（遠・土橋）、「鉄炮洲稲荷橋湊神社」（中）、「芝神明増上寺」（遠）、「品川すさき」（遠）、「井の頭の池弁天の社」（中）、「王子滝の川」（遠）、「木母寺内川御前栽畑」（中）、「真間の紅葉手古那の継はし」（遠）、「堀江ねこざね」（遠）、「小奈木川五本まつ」（遠）、「両国花火」（遠）、「小梅堤」（遠・土橋）・「御厩河岸」（遠）、「深川木場」（遠）、「愛宕下薮小路」（溝川の上に家を建てている）、「高田姿見のはし悌の橋砂利場」（中）。

太字は中央区の風景の絵ですが、この中にはよほど目をこらさないと橋が〝発見〟できない絵も三～四枚あります。この点ぜひ読者のみなさんにもご検討をおねがいしたいものです。